

日野ひかり幼稚園ファミリー通信

「登下校の危険・事件・事故から子どもを守る！防犯意識を高めよう！」

おうちのかたと一緒に行動することが多かったお子さんも、小学校入学と同時に1人行動が増えます。1人でいるときに、何に気をつけるべきなのか。もしものときにはどうすればよいのか。

ただ心配し過ぎるのではなく、楽しい小学校生活を送るために親子で防犯意識を高める準備が必要です。

小学生になると、お子さんの環境と行動範囲はガラリと変わります。

大人の送り迎えはなくなり、自分で歩いて登下校します。

お友だちと約束して、放課後に遊びに出かけたりもするでしょう。

1人で行動するということは、その分危険も増すということなのです。

事故や事件の話ばかりをして過剰に怖がらせる必要はありませんが、何も教えないままでは、リスクは減らせません。

お子さんに伝えるときのポイントは、必ず「注意」と「安心」をセットで話すということ。この2つに注意してほしい。「もしものときはこうすれば安心だよ」と、対処法や解決法を具体的に示してあげれば、不安な気持ちや恐怖心ではなく、防犯意識を育てることに繋がります。

ほんのわずかな距離でも、お子さんが1人で歩く、家の近所の「1人区間」で事件・事故が起きやすいというデータがあります。

とりわけ下校時は、お友だちと一緒にいるときや人が多い場所は大丈夫でも、住宅街は人通りが少なかったり死角が多かったりと狙われやすくなります。

特に心身ともにまだ幼い低学年の子どもの犯罪に巻き込まれやすいのも事実です。

この「1人区間」の危うさをおうちのかたが正しく理解し、何かあったときに駆け込める場所をいくつか確保すると安心です。

ただし、「ここに助けを求めろんだよ」と言葉で教えるだけでは、子どもは実感がありません。

お店ならお子さんと一緒に普段からよく利用したり、お店の人と接点を持てるようなおよいでしょう。

防犯視点で地域を見直し、シミュレーションすることで、もしものときの行動が変わってきます。

共働きでおうちのかたが家にいない、「1人区間」は学校も目が届かない、昔は充実していた地域の見守りボランティアも減ってきている。

犯罪を未然に防ぐためには地域の見守りの「目」が多いことが重要ですが、残念ながら少なくなっているのが現状です。可能であれば、買い物、犬の散歩、家の前の掃除など、子どもたちの下校時間に合わせて外に出ることを意識してみましよう。おうちのかたが在宅勤務であれば、「1人区間」だけでも

お迎えに行つてあげるのはどうでしょうか。人の目があると、犯罪は起こりにくくなります。自分の子どもを守るためにも、地域の防犯のためにも、見守りの「目」が多い環境をつくることは、安全を高める有効な手段です。



ほめるときの3つのポイント

子どもがよいことをしたらほめる、望ましいことをしたらほめる、をひたすらくり返せば、子どもは「いいことしよう」「望まれることをしよう」と思うと、ドーパミン神経の活動が増すようになり、「やる気」が高まります。

だから、子どもをたくさんほめよう——これが基本です。ひとくりに「ほめる」といつても、どんなふうにほめたらいいの？というかたに向けて、ここからは、ほめるときのポイントや、裏技をご紹介します。

①能力や結果ではなく、努力をほめる

努力をほめられた子どもは、さらに努力を認められようと難問にチャレンジするが、賢さをほめられた子どもは、自分を賢く見せるために間違つのを恐れるようになるというのです。「あなたはもとも賢いのよ」「勉強できるはずよ」「さすがに頭がいいわね」といったほめ方は、子どものチャレンジ精神や努力を奪ってしまう可能性があるのです。

②写真を一緒に見返しながらほめる

子どもががんばったときの写真を家に貼り出すことが自己肯定感の育成に役立つのではないかと主張されてきました。そこで、東京学芸大学の岩立先生からはウェブ調査を行いました。その結果、子どもや家族の写真を飾っている家庭の子どものほうが、飾っていない家庭の子どもより自己肯定感が高いことがわかりました。

また、写真を飾っていない家庭に写真を飾ってもらい、その写真で子どもをほめる取り組みをしてもらったところ、子どもの自己肯定感が高まったのです。

③しかる場面でも、「二度目をしなかったこと」をほめる。

ある幼稚園に通つ友人のお子さんが友だちとけんかになつて頬をたたいてしまったんだそう。園に呼び出されたお母さんは、子どもをしかり、相手の子やお母さんや園に親子共々謝罪し、子どもを連れて帰ってきました。

してはいけないことをしてしまったらちゃんとしかり、頭を下げるにはきちんと頭を下げ、子どもにもそうさせる。

このお母さんの対応は、非の打ちどころがありません。子どもも自分の非はわかつてる様子でした。

でも、口は開かず、何だか少しいじけていました。

「二度目をたたかなかつたのは、なぜ？」

「一回も、三回もたたきたかつたのに、一回でやめたのはすごいじゃない」と。

背中がまるくなつて、少しいじけていたその子は、だんだん胸を張ってきました。目を輝かせて、こう言ったそうです。

「だって、人をたたいたいじゃないじゃない！こちらが望む理屈が子どもの口から出てきました。」

しかも誇りを持って！脳科学的にも、このアプローチはとて理にかなつています。です。というのは、脳の中には、無意識的な動作にかかわるドーパミン系と、快感にかかわるドーパミン系があり、線条体を介して無意識的な動作と快感が結びつく回路があります。

子どもの反省を、自発的な考えや行動に結びつけたいのなら、すでに起こっている子どもの考えや行動を利用するのが正解です。

それを見つけて出してほめます。すると、このふたつが結びつきやすくなります。ぜひたくさん親子で会話をし、ほめかたのポイントを日々の子育てに活かしてください。